

〔論文〕

ルーシー・E. H. イングと *Heathen Woman's Friend*  
ー 1870年代のメソジスト派アジア伝道における宣教師夫人の活動と貢献 ー

北原 かな子

Key words : ルーシー・E. H. イング、メソジスト派、キリスト教海外伝道、来日女性宣教師、ジョン・イング、東奥義塾、*Heathen Woman's Friend*

Summary

Lucy E. H. Ing was the wife of Rev. John Ing, a Methodist missionary. She went to China with her husband in 1870 and was engaged in Christian missionary work and woman's education for three years in Kiu Kiang. When they stopped by Yokohama on their way back to the USA, by sheer chance, John was invited to become a "foreign teacher" for the Tō-ō-gijuku school in the Hirosaki City. Lucy accompanied her husband there from 1874 to 1878. During this period, they taught not only the English language at the school but also Christianity to the people in Hirosaki. They converted many to Christianity and established the Methodist Church. Since many became preachers under the guidance of John and Lucy, this church received a high reputation in the history of Methodist mission in Japan. However, these success stories have mainly focused on her husband's achievement, largely ignoring Lucy's work.

This paper will introduce Lucy's articles in *Heathen Woman's Friend*, a magazine published by the Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church in the USA, in order to shed light on Lucy's activities and contribution to missionary work and woman's education. By a closer examination of these articles, this paper will also point out the importance of studying the accomplishments of "a missionary's wife" from the gender perspective.

はじめに

ルーシー・エリザベス・ハウレー・イング (Lucy E. H. Ing 1837-1881) は、イリノイ州出身で1874年末から1878年3月まで、宣教師の妻として津軽地方弘前に滞在した女性である。夫であるメソジスト派宣教師ジョン・イングは弘前の私学東奥義塾<sup>1</sup>で教鞭をとる傍ら同地方にキリスト教を広め、日本におけるメソジスト

派宣教に大きな功績を残した。イングは東奥義塾の生徒たちにディベートを伝えたが、それは弘前における自由民権運動の源流となり、青森県政にも影響を与えた。津軽地方にとって文字通り「西洋文化の窓」であった東奥義塾については、青森県の近代化にとって欠かせない存在として、これまでのさまざまな研究が蓄積され

ており<sup>2</sup>、ジョン・イングも中心的な人物として、その貢献を語られてきている。

ジョン・イングは家族で弘前に滞在しており、途中からは妻のルーシーも東奥義塾で英語を担当した。特に女子教育はルーシーの担当であり、またキリスト教布教についても、オルガンで讚美歌を指導したのはルーシーだった<sup>3</sup>。ジョン・イングが東奥義塾教育や津軽の近代化において築いたとされる功績は、実際にはジョンとルーシーの協働だった部分も多い。しかし今まで、ルーシーという人物に焦点をあてた研究はでない。それはルーシーが独立して宣教に従事する女性宣教師ではなく、宣教師の妻としての立場であったために、これまでその貢献が見逃されてきていたからと思われる。

本稿は、イング夫妻をアジアに派遣したメソジスト派の伝道関係資料やイングの母校であるアメリカ、インディアナ州のデポー大学<sup>4</sup>に所蔵されているイング夫妻にかんする史資料をもとに、ルーシーの人物像を描くことを目的とする。特に *Heathen Woman's Friend* 掲載記事の中でルーシーが書いた記事を紹介するとともに、宣教師夫人という範囲を超えて活動していたルーシーの貢献について考察する。

## 1. ルーシー・イングと中国への伝道

### (1) ルーシーの生い立ちと中国伝道

ルーシーは1837年9月27日、アメリカ、インディアナ州ブルーミントンに、キリスト教長老派の牧師であるランソム・ハウレー (Rev. Ransom Howley) とサラ・マリエッタ・ハウレー (Sarah M. Howley) の3女として生まれた<sup>5</sup>。ルーシー自身も長老派教会の一員であり、マサチューセッツ州のマウント・ホリオーク・フィメール・セミナリー (Mount Holyoke Female Seminary) に進学している。1837年創立の同校は、女性のために設立された教育機関の中では米国最古の学校の一つできわめて高い教育水準を誇り、国内の女性のためのカレッジ

の範となった学校である<sup>6</sup>。創設者のメアリー・ライオンは、教育目標の一つとして「学生のなかに宣教精神を拓く」と掲げており、実際1837年の開校後は、アメリカ国内外で宣教師として活動する卒業生を輩出した。これらの卒業生は赴任先で学校を開くなどして、少女や女性たちの生活向上に貢献した。1839年から1950年代までの間、宣教に従事した卒業生の数は500名を超える<sup>7</sup>。卒業しなかった在生も含めると日本にも54名が来ており、日本におけるプロテスタントメソジスト派宣教活動の中心で、青山学院創立者の一人であったロバート・S. マックレー (Robert Samuel Maclay 1824-1907) の妻ヘンリエッタ・マックレー (Henrietta C. S. Maclay 1823-1879) もその一人である<sup>8</sup>。

こうした環境で学んだルーシーは同校を1858年に卒業したのち、インディアナ州の5つの郡 (counties) で教師として働いた。ルーシーが教鞭をとっていたのは、パットナム郡 (Putnam county)、オーウェン郡 (Owen) 郡などで、さらにインディアナ州のブラジル (Brazil)、エバンスビル (Evansville)、ロックビル (Rockville) の学校でも教えた<sup>9</sup>。

1870年6月30日、ルーシーはメソジスト派宣教師のジョン・イング (John Ing 1840-1920) と結婚した。ジョン・イングはプロテスタント・メソジスト派宣教師スタンフォード・イング (Stanford Ing) とメアリー・イング (Mary Ing) の長男で、南北戦争に従軍後にインディアナ州にあるインディアナ・アズベリー大学 (現在のデポー大学) で学び、1868年に卒業した<sup>10</sup>。ジョンは大学卒業後にメソジスト派セントルイス伝道協会<sup>11</sup>に所属しており、ルーシーは結婚後間もなく、宣教師としてセントルイスから中国に派遣される夫とともに、1870年に中国に向かった<sup>12</sup>。

### (2) 中国での伝道生活

ルーシーもジョンも共に中国語を習得してお

り、流暢に使いこなしたとされている<sup>13</sup>。ルーシーの書いた書簡によると、夫妻は1871年10月15日に九江(KiuKiang)に到着し、宣教活動を始めた<sup>14</sup>。1872年1月3日、同地で長男のジョン・ハウレー・イング(John Howley Ing)が誕生した。また1872年12月17日には長女マリエッタ・イング(Marietta Ing)が誕生したものの、すぐに亡くなった<sup>15</sup>。マリエッタは九江近郊の長江沿いの土手にある墓地に埋葬された<sup>16</sup>。そうした生活の中でルーシーは健康を害したことからイング夫妻は帰国を決意した。アメリカへの帰国途中に立ち寄った日本の横浜で1874年10月18日、イング夫妻の三番目の子供であるヘレン・ルイーズ(Helen Louise Ing)が生まれたが、11月13日に息を引き取った。ヘレンは横浜の外国人墓地に埋葬され、横浜に在住していた宣教師たちは宗派を超えて集まり、ヘレンの魂のために祈ったという<sup>17</sup>。悲しみに沈んでいた夫妻は、弘前の私学東奥義塾で教えてくれる教師を探していた同校関係者と出会い、帰国予定を変更して弘前にくる決意をする。ルーシーはそれから1878年3月にアメリカに帰国するまでの3年半にわたって、東奥義塾で教鞭を取った夫とともに、弘前へのキリスト教布教や女子教育などに尽力した。

## 2. ルーシーと *Heathen Woman's Friend*

### (1) 女性宣教師海外派遣と活動報告

インゲ一家がアメリカを出てからの様子は、時折母国に送られた書簡や報告書の類で垣間見ることができる。夫であるジョン・イング自身も宣教師としての報告書の他に、自分の活動や中国・日本についての見聞録的なコラムを書いており、それが *Central Christian Advocate* 誌に時折掲載された。またイングの場合は父に宛てた自筆書簡も残っており、現在はイングの出身校デポー大学(DePauw University, IN, USA)で閲覧可能である<sup>18</sup>。ただイングの記述内容には女性や女の子たちへの視点はほとんど

含まれない。

ルーシーの記述には子供や女性をめぐる日常が描かれており、さらに一人の女性としてその時代の異国文化を見る眼差しも伺うことができる。ルーシーの文章やその書簡が掲載されたのは、*Heathen Woman's Friend* とイングの母校所在地で刊行されていた新聞 *Greencastle Banner* である。そのうち、*Heathen Woman's Friend* については、女性宣教師の活動を地理学的な視点を踏まえて研究した齋藤元子が詳述している<sup>19</sup>。ここでその研究を参考として同誌の発行経緯その背景、そしてその意義を述べる。

1800年代初頭に始まったアメリカプロテスタント諸派の海外伝道は、男性宣教師が主力であり、女性はその妻という存在に過ぎなかった。その宣教師夫人に期待された本来のあり方は、異国で布教する夫を支え、子供を育て、敬虔なクリスチャンホームを切り盛りすることであり、家庭の主婦として生きることが理想的な生き方とされた当時のアメリカの風潮の延長線上にあった<sup>20</sup>。実際に男性宣教師とその家族によるアジアやアフリカへの海外伝道が行われるようになると、着任した宣教師たちは異教を信じて迷信に囚われる現地女性たちの姿を目の当たりにすることになる。しかし、これらの女性に手を差し伸べるという必要性を感じても、現地女性の生活空間に男性宣教師が関わることには限界があった。こうした経緯から宣教師夫人の立場ではなく、単独で宣教師として活動する女性宣教師を伝道地に派遣する必要性が認識されるようになり、1861年に「女性一致海外伝道教会(Woman's Union Missionary Society of America for Heathen Lands)が結成され、さらに南北戦争をへて、プロテスタント各派が女性海外伝道教会を結成するようになった。これら女性による教会は、たとえば資金源を親教会である各教派の海外伝道教会に頼らず女性たち独自で集めるなど、軋轢と協調を経験しながらも、それぞれの教派のあり方によって女性たち

の活動の場を展開することになった。中でも一番大きかったのは、ルーシーやイングが所属したメソジスト監督派による組織である。

## (2) メソジスト派監督教会海外伝道協会と *Heathen Woman's Friend*

メソジスト監督派教会女性海外伝道協会(The Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church)は1869年3月にボストンで結成され、さらにその3ヶ月後に発行されたのが、月刊紙 *Heathen Woman's Friend* だった。この中には、海外に赴任した女性宣教師たちからの現地レポートや、それを支えるアメリカ国内の支部報告、献金状況や収支報告が掲載された。その後、誌名の「Heathen」は1896年に *Woman's Missionary Friend* と変更されたが、1940年まで70年以上継続した。この雑誌は海外に赴任した女性宣教師たちの活動やその経験、知識を国内で支援する女性たちに伝え、双方の経験をシェアする存在として機能した<sup>21</sup>。実際、アメリカ本国から見ると異教の地であったアジアをはじめとする国々の風俗習慣や歴史、地理を紹介する文章が随時掲載されており、さらにそうした情報を寄せてくれる女性宣教師自身の生き方も含めて、情報発信ツールの少ない時代にあって、貴重な媒体の一つであっただろうと察せられる。

## 3. 中国におけるルーシーの宣教支援活動

### (1) 九江派遣の女性宣教師報告書に見るルーシーの活動

ここまでルーシー・イングを中心として書いてきたが、もともとルーシーは夫のジョンがメソジスト派宣教師として中国に派遣されたことに伴ってアジアに来たのであって、彼女自身は女性宣教師ではない。前述のように、男性の宣教師の同伴家族として現地に赴いた夫人たちに対して求められたのは、あくまで夫である宣教師を支えつつ、現地で自らの子供たちを育てて

クリスチャンホームを切り盛りするという役割だった。交通が不便で気候風土が違うなど慣れない環境での生活は厳しく、宣教師の妻がさらにその上に宣教活動をするということは、時に命をかけることになる程に過酷だった<sup>22</sup>。そのため、本来ルーシーに求められたのは、現地での宣教活動ではなかったはずである。では実際にはどうだったのだろうか。

ルーシーの姿はイング夫妻が伝道活動を行っていた九江から発信された女性宣教師たちの報告書の中から浮かび上がってくる。前述のようにイング夫妻は1971年10月に九江に到着した。そして同地にメソジスト監督派教会女性海外伝道協会から女性宣教師を派遣されたのは、翌年のことだった。*Heathen Woman's Friend* の1872年11月号には、「ミス・ハウとミス・ホークが北西支部から九江に向かった」と記載されている<sup>23</sup>。1873年5月号掲載のホークの報告によると、2人が九江に到着したのは1872年の11月13日のことで、彼女たちはそこでイング夫妻から歓迎を受けている。1873年1月31日に書かれたこの九江からの最初の発信で、ホークは現地の状況を説明するとともに、劣悪な環境の中でやらなければならないことは山積みになっているものの、言葉がわからないという問題が自分たちにのしかかっていると書いた<sup>24</sup>。海外伝道で言葉の壁が大きかったことをあらためて示す内容だが、ここで若い女性宣教師2人の助けとなったのが、現地で夫の宣教を手伝っていたルーシーだった。ルーシーは到着するであろう2人の手伝いになるよう、現地の女性(Bible woman)に聖書を読むように誘ってしてくれたのだった<sup>25</sup>。ルーシーのおかげで、この女性はすでに4つの福音書をほとんどすべて読めるようになっており、毎朝一章を読むためにホークたちの中国語の教師とともに来ていた。明るく元気で、ホークたちはとても助けになるだろうと考えていたようである<sup>26</sup>。

実際、彼女(Bible woman)とともに現地の

女性たちの集まりをいくつかを訪ねてみたところ、この女性(Bible woman)は威厳を持ちつつも控えめなやり方で本を読み、そして周りの女性たちから尊敬を集めており、ホーグたちとしても満足のいくものであったらしい。時にはうまくいかないこともあったようだが<sup>27</sup>、異国で異教を信じる人たちに自分たちの神の福音を伝える時、自分たちにはできない現地の言葉で話してくれる人がいるという効果の大きさ、そして何より着任した若い女性宣教師たちが大いに安心感をもったであろうことは、想像にかたくない。その背景に、女性宣教師到着を意識して手助けになりそうな中国人女性に聖書購読を勧めていたルーシーの貢献があったのである。

ホーグに続いて、ハウも九江での体験を記している。纏足などの因習や迷信に驚き、女性に知的な学習を求めない風土に悩みつつも、女性や子供に福音を伝えようと苦勞する中で、文字を読める女性が8人いたことに注意を惹かれている。そのうちの2人は、学校がなく教育を受けられない中で、わずか2年ほどイング夫人から聖書の読み方の指導を受けていただけで、文字を読めるようになっていた<sup>28</sup>。ルーシーは福音を説く以上に現地女性のリテラシーを伸ばしたわけで、教師の経験が長かったルーシーの指導力を窺わせるエピソードと思われる。

#### (2) 自ら書きはじめたルーシー

当初は九江着任の女性宣教師による報告書に名前が出ていたルーシーだが、やがて彼女は自分の名前でも記事を書くようになった。そのうち、“The Brazen Buddha Made Bread”、“An Incident”は現地のエピソードなどをわかりやすく伝えるものだが、1874年5月号掲載の“Bible Readers in Kiu Kiang”では、現地女性の読み書き能力について直接的に言及している。そこには、イング夫妻が赴任したとき、九江では文字を読める女性がほとんど見つけられなかったものの、今は3人ほど読めるようになったこと、

その人たちが宣教師とともに行動すること、時折他にも文字を読む人たちのことを耳にするようになったこと、3人のうちの2人は書くこともできるようになったこと、3人が教師あるいは読み手として雇われていることなどが書かれている。総じて教育水準が低く女子の教育は難しい現状の中で、学があるとされる女性はイング夫妻らが雇用したいという申し出を断ったものの、もし伝道本部が女性医療宣教師(Medical Lady)を派遣すると、喜んで一緒に行動するだろうという期待などが記されている。齋藤元子は、宣教師夫人が女性宣教師たちを助けて海外伝道運動の推進を図る存在だったということを描いている<sup>29</sup>が、ルーシーが書いたこの「女性医療宣教師を派遣すると効果がある」という一文は、まさにそれにあたる。ルーシーはこうした伝道本部への女性宣教師派遣アピールだけではなく、派遣されてきた女性宣教師たちが速やかに仕事に入れるよう、夫の仕事を支えながらも現地女性の読み書き能力を伸ばし聖書を読めるようにする活動をしていた。これはおそらく「宣教師夫人」の役割を超えていたものであり、その努力は女性宣教師による海外伝道活動の発展に寄与するものであったといえよう。

#### 4 ルーシーと弘前

##### (1) イング夫妻の弘前着任とルーシーの発信

ルーシーは中国で活動する中で健康状態が悪化したことから夫とともに帰国を決意し、途中で横浜に寄留した。前述のように、その間に出会った東奥義塾関係者の要請を受け入れて、家族で弘前に向かった。同道したのは本多庸一で、本多は幕末から横浜に滞在したジェームズ・バラ(James H. Ballagh 1832-1920)から最初に洗礼を受けた中の一人である。1874年から約3年半にわたった滞在期間中、夫妻は東奥義塾生を指導しながら宣教活動を行い、東奥義塾半年後の1875年6月には初の受洗者をだし、同年10月には教会が設立されるなど、夫妻のキリスト教

伝道はメソジスト派の記録に残る効果をあげた  
30。

この弘前着任はあくまで宣教師ジョン・イン  
グが東奥義塾に教師として雇用されたことから  
実現したものであったが、ルーシーは夫を手伝っ  
て東奥義塾生たちに英語を教えるとともに、特  
に女子教育に関心を持ってその様子を書き残し  
た。これまで述べたように、ルーシーはもとも  
と長く教職にあったこと、また中国内陸部の九  
江において女性たちの教育に尽力していたこと  
から、日本で女子教育の記述にもそうした経  
験が反映されたものと思われる。弘前滞在中に  
ルーシーが書いたものは、*Heathen Woman's  
Friend* のほか、イングの母校所在地であるイ  
ンディアナ州グリーンキャスルの新聞である  
*Greencastle Banner* にも時折掲載された。そ  
のうち、これまでの調査でわかっているのは以  
下の通りである。

< *Greencastle Banner* 掲載 >

“A letter from Japan” *Greencastle Banner*,  
July 29, 1875

“More from Japan” *Greencastle Banner*, Aug  
5, 1875

“Letter from Japan” *Greencastle Banner*, Nov.  
5, 1875

“Letter from Japan” *Greencastle Banner*, Feb.  
1, 1877

“Education in Japan” *Greencastle Banner*,



May 17, 1877

< *Heathen Woman's Friend* 掲載 >



**COURAGE!** The Feast of Coronation is a whole year nearer than last New Year's Day.

When the vial of dry, black blood is annually brought forth by the Neapolitan priest and placed in sight of the head of the holy martyr from whose veins it was drawn, the Romaniasts assure us that it "melts, bubbles up, and flows on every side." This standing miracle of the liquefaction of the blood of St. Januarius will symbolize the circumstantial effect which a stimulus of the

as to persons, "I am come that ye might have life, and that ye may have it more abundantly."

What a Rembrandt picture is this, from "Our China Visitor"!—"As I was passing along the street a man came by me with a lighted lantern in his hand—notwithstanding the sun was shining brightly—and a lot of bedclothes upon his shoulder. Behind came a woman with a bundle in one arm, and a lot of copper cash tied with a scarlet cord was being dragged on the street

Notes from Japan, *Heathen Woman's  
Friend*, Vol.6-11 1875.5

Notes from Japan, *Heathen Woman's Friend*,  
Vol.7-3, 1875.9

From Tsunara *Heathen Woman's Friend*,  
Vol.7-4, 1875.10

From Trugara No.1, *Heathen Woman's Friend*,  
Vol.7-8, 1876.2

From Trugara No.2, *Heathen Woman's Friend*,  
Vol.7-9, 1876.3

About Japanese Women. (Extracy from a letter  
from Mrs. Ing, of Hakodati) *Heathen  
Woman's Friend*, Vol.8-8, 1877.2

The little women of Japan-How they look.  
*Heathen Woman's Friend*, Vol.8-10,  
1877.4

The little women of Japan- In the nursery  
*Heathen Woman's Friend*, Vol.8-11,  
1877.5

The little women of Japan-In the schoolroom,  
*Heathen Woman's Friend*, Vol.8-12,  
1877.6

これらの資料には、女性や女の子たちの動向  
にかんするものもかなり含まれる。宣教師夫人  
であったルーシーの筆には、「異教を信じる女

性たち」に神の恩寵を伝えたいという意思が反映される部分はあるものの、記録に残りにくい日常の、特に女性たちについての語りは西洋文化を受け入れ始めた明治初期日本の「奥地」（非居留地）の人々の生活を今に伝えるという意味でも貴重である。

ルーシーの記事のうち、*Greencastle Banner* 掲載分については、たとえば元弘前大学教授である故山本博氏の研究「ジョン・イングと弘前バンドー津軽の英学(その五)ー」<sup>31</sup>の中で、“More from Japan” *Greencastle Banner*, Aug 5, 1875に描かれた弘前初の東奥義塾生受洗の様子が紹介されている。またこの新聞に掲載された書簡類には、弘前の女子教育や女性たちの様子が具体的に記されているが、それは女性史資料の少ない明治初期における貴重な記録でもあり、1999年に青森県から刊行された『青森県女性史』、および拙著『洋学受容と地方の近代』においても活用している<sup>32</sup>。

(2) *Heathen Woman's Friend* に見るルーシーの姿

一方の *Heathen Woman's Friend* については、管見の限りルーシー・イングに関連してこれまで言及されているのは齋藤元子の論文および拙稿<sup>33</sup>のみである。特に齋藤はこの雑誌に連載として設けられていた子ども向けコーナーに注目し、その分析をおこなっている。ここでは齋藤の知見を踏まえつつ、さらにルーシーが書いた記事について検討する。

*Heathen Woman's Friend* を刊行したメソジスト監督派教会女性海外伝道協会から日本に最初に着任したのは1874年のドーラ・スクーンメーカー (Dora E. Schoonmaker, 1851-1934) である。それから1878年のルーシーが日本を離れるまでの間、日本の記事は女性宣教師であったスクーンメーカーよりも、同時期に函館に滞在したフローラ・ハリスやルーシー・イングのような宣教師夫人による記事の方が多かつ

た<sup>34</sup>。ルーシーの場合は、1875年から1876年の掲載分は、日本や滞在地津軽からの報告の形を取って生活の様子や風景、祭りなどの風習について書かれている。特にイングが東奥義塾に着任してまもない1875年の内容には、宣教の効果がめきめきと出てきた様子が記されており、その文章には喜びがあふれるかのようである。夫妻が中国で宣教活動を行なった時、習得した中国語を駆使して努力したにもかかわらず、洗礼を受けたのは4人だった<sup>35</sup>。しかし1874年末に弘前にきてからは夫妻の自宅に集まる人たちが増え、東奥義塾の生徒以外の人たちも集うようになり、そして1875年6月6日には14名に洗礼を授けることができた。イングもルーシーも日本語を使いこなすことはできなかったが、そばで宣教を手伝った本多庸一が十分にその役割を果たしたと思われる。本多は弘前藩学校でも極めて優秀でかつ人格者として知られており、彼の人徳がキリスト教布教に効果的に影響したと指摘する説は多い<sup>36</sup>。実際、本多は熱意溢れる言葉で集まった人たちに福音を伝えており、イング夫人にとっては説教者の言葉(日本語)自体は理解できなかったものの、現地の言葉で説かれる福音を受け入れる人々の姿は、彼女の目に非常に興味深い光景として映ったようである<sup>37</sup>。続く1876年2月、3月に連載された *From Trugara* は、岩木山の祭礼であるお山参詣、および鯉ヶ沢への巡礼の様子となっている。これらは外国人の目から見た当時の風景というにとどまらず、時の経過とともにおきる変化がなかなか書き残されることのない民俗の資料としても興味深い。そしてこの項の最後にルーシーが日本の女性について書いた文章を全文紹介する。

(3) ルーシーが描いた日本の女性  
ABOUT JAPANESE WOMEN

(Extract from a letter from Mrs. Ing, of Hakodati)

You ask about the difference between the women in China and Japan. You know the condition of this country, generally, is better than that of China. The country is not so crowded with people, they do not seem so poor, they live much better, and the proportion of women who read is far greater. In one respect the women of the two countries are alike, - they are ignorant of the true God, and the way of salvation through Jesus Christ, and the door is wide open for work among them.

Of course, there are all classes here, as in other countries. Two women, with whom I am best acquainted, are good Chinese scholars, and write poetry. A number I have met seem quite refined and intelligent. There is as much apparent difference between the lady here, dressed in a handsome silk or crape robe, with hair elaborately arranged, and the poor fish, flower, or vegetable woman, trudging along with her burden on her back, as between the two classes at home.

Here the houses seem more like homes than in China, the women more domestic in their tastes and customs. They are very industrious, and spin, weave, cook, and saw. Their houses and door-yards are wonderfully clean, and would put to shame hundreds of homes in the United States. However humble the house, you would hardly find one without flowers in summer.

The Japanese have many books, some illustrated, chiefly histories, stories of war, love, or fairies. Some of these fairy tales are quite pretty and have excellent morals. The mothers and grandmothers repeat them to the small people and inculcate many a good lesson thereby.

Some of women and girls give considerable

attention to music. I have seen little girls, of seven or eight years, who showed that they had spent many hours in being drilled in lessons upon their guitars. The harp is also used.

The majority of the worshippers I have seen in the temples have been women. We trust that you will not forget the women and girls of this city. Please pray for them. It is sad to think that with all their blessings, they know not of the blessed Jesus, who would give them true peace.

I feel so anxious to see a good work going on among them!

仏教を信仰する女性たちをみる目には、キリスト教宣教師夫人ならではのと思われる部分もあるが、中国という国を経験したうえでの日本の観察としては実に興味深い文章である。イング夫人の目には日本の方がよく見えたようである。ルーシーが親しくしている2人の女性はおそらく漢詩を嗜んでいたのだろう。階級によって装いに違いがあることや、日本人女性は中国の女性に比べると家庭的で、糸を紡ぎ、布を織り、調理や裁縫までとにかくよく働くこと、家屋や道路はアメリカに比べてもとてもきれいなこと、そして日本人の読書の習慣や、特に祖母や母が子供に読み聞かせるお伽話がとても道徳的で優れていることなどが語られている。女性や女の子たちは音楽に熱心で、7-8歳の女の子がギターやハープを何時間も練習していることなどは、当時の様子を忍ばせて興味深い。おそらくこの文章でのギター、ハープとは、三味線、箏のことと思われる。

そして特に興味深いのは、この文章の冒頭を読む限り、明らかにルーシーが誰かからこのテーマで執筆を依頼されていることである。日本到着時の報告や津軽の近況記事を経て、ルーシーは日中の女性の比較をテーマとして記事を

依頼される存在になっていたということであろう。それが次に述べる子ども向けコーナーへの執筆につながったものと思われる。

##### 5. *Heathen Woman's Friend* 中の連載コラム、Children's Corner

###### (1) Children's Corner とルーシー

*Heathen Woman's Friend* には、創刊当初より子ども向けのコーナーである“Children's Corner”があった。齋藤元子によると、この子ども向け読み物であったこのコーナーがつけられたのは、将来の宣教師育成という目的に加え、教会の資金源として子供からの献金にも期待していたからであるという<sup>38</sup>。齋藤は1877年5月のルーシーによる“The little women of Japan in the nursery”から1880年12月号までの同コーナーを調査し、日本関係の読み物が15話、そのうち7話がルーシーおよび函館在住宣教師であったハリス夫人によることを指摘している<sup>39</sup>。ただし、それに加えて1877年4月号にもルーシーの筆による“The little women of Japan-How they look”が掲載されているので、実際には16話中の半分に当たる8話が宣教師夫人によって書かれたことになる。そのうち、津軽での女の子たちの子守風景や雛祭りの様子が描かれた1877年5月号掲載の The little women of Japan- In the nursery については、齋藤論文に訳文が紹介されている<sup>40</sup>。

ここでは、ルーシーの筆による子ども向け日本紹介として、それぞれ原文を紹介する。

###### (2) ルーシーが描いた日本の女の子たち(資料紹介)

###### ① The little women of Japan-How they look.

LADY MARY WORTLEY MONTAGUE, who about one hundred and fifty years ago had travelled much, and in many countries, said after all she had seen only men and women; so I suppose the “little women” are

much the same the world over. I *know* that many I see here are not very unlike the little maidens of the United States in their love of fun, good-natured teasing, fondness for dolls, storytelling and hearing, kindness to the little brother and sister, and the like. Their style of dress and language are very different certainly. Here are a few of their names: I-wa, Ta-ma, Fu-mi, Mat-su, Ta-ki, Tsu-ni, Mura, Sa-da, and Mai-ya. If we speak to one we say, O Iwa, or O Iwa San, etc., “O” being an honorable prefix used in speaking to or of another. San is used as Mr., Mrs., and Miss.

I see some whose appearance plainly indicates a thorough acquaintance with poverty and neglect, and I see many bright, happy girls here. Their clothes are in the same style as their mothers' and grandmothers' and no jealousy or trouble ever arises because some progressive little maiden discovers that her dress is made after last year's fashion, for fashion do not change here yet. The dress is a long, narrow garment, reaching from the neck to the feet and much longer. If very nice, it is gathered about the waist by a wide, bright-colored girdle, formed into a bow or knot at the back; the long, hanging sleeves, with bright facings, make large pockets, but are pronounced inconvenient. Over this a short garment is often worn, and a tiny apron is added. The black hair is neatly dressed, and has usually some ornament, it may be of tortoise-shell, of beads, flowers, a bit of colored crape or paper. On the feet are worn short hose, made of blue or white cotton; mitten-like, they have a compartment for the thumb of the foot. These are sufficient for in-doors; out of doors they walk about, quite independent, upon their wooden clogs, mounted at a safe

distance above mud and water or dust.

The maidens, small as well as large, admire a fair complexion, and are very profuse in the use of white powder on the face and neck, and red paint (made from saffron flowers) on the lips. The little women are certainly a most interesting portion of this empire's population, and much more could be written about them, but enough for the present.

*Hirosaki, Japan, Dec. 13, 1876.*

② The little women of Japan- In the nursery

It is not at all uncommon to see the "little women" walking or playing about with a baby securely fastened to their backs by the always convenient *obi* or girdle.

The little one is probably quite enclosed in his sister's garments, nothing to be seen of him except his shaven head, with or without a cap, and one hand over her shoulder. Sometimes she runs, jumps, whirls around, playing ball with hand and foot; the little head bobs up and down, and the little owner laughs at the sport or sleeps as serenely as if in his little bed. I have seen tiny girls, with babies almost as large as themselves on their backs.

As for dolls, there seems to be almost an endless variety, from the large, life-size doll that can cry, through the various grades and sizes to the doll with the paper head dexterously fashioned by nimble fingers, and having clothes without any body within. One day I discovered my mistake just in time to prevent being laughed at for inquiring after the health of one of the large dolls, it was so life-like. Another day I had a peep into a room where a feast had been spread for a petted grand-daughter. There were fruits, cakes, and candies on the low table, at which were

also placed the family of dolls. A man and his wife, dressed in grand style,- he in rich silk garments with swords at his side, she in robes of silk and crape, -were seated in state in a conspicuous place, while others not so grand occupied their proper positions. Once when the girls left the room for a race over the house, the boys, on fun intent, played queer pranks with the dolls; they turned the heads of the great man and his wife quite around, tried the effect of tin trays in the lady's hair, and after producing general confusion, scampered away.

We often see the little girls carrying their dear dollies in their arms or on their backs through the streets, and some time you shall hear about the Feast of Dolls, which was formerly celebrated much more generally than now, during the months of February and March.

③ The little women of Japan-In the schoolroom

THE politeness of the Japanese is well known. Before the little ones can walk or speak they are taught to bow to friends. If a present is given, the little hand raises it towards the forehead, and a bow acknowledges the favor. The thoughtful politeness of the girls towards each other is very pleasant. At school they are taught the Chinese character in addition to their strictly Japanese studies; they also learn to sew and embroider. Each pupil when she enters or leaves the school bows to her teacher, nearly touching the floor with her forehead; her teacher returns the bow in like manner. To-day I saw a class of forty examined; first in the names of "common things" upon charts, Chinese characters used, then in writing numbers, Arabic method, then

in the addition tables, Japanese. The teacher seemed well pleased, so I conclude she thought her little girls had done splendidly. Sometimes I have gone to the schoolroom during the last hour, - from three to four o'clock, p.m., -when lessons were being learned for the next day. There were some seventy-five girls seated in three classes, on the soft mats, with low forms before them; one, probably the best scholar, repeated a few words of the lesson aloud, then all in the class followed in concert, each pupil in her place in perfect order, and not a teacher to be seen, till, after looking closely, I found at the farthest end of the large room, two or three busy with the sewing-class, or with the report for the day.

Some of the little maidens are instructed in music, and even when too small to hold the guitar alone, sing and perform on the instrument quite independently.

Although fruit and nuts are abundant, and the shop-windows make a most tempting display of cakes and candies, yet you will never see these little maidens "munching" confectionery in school, while chewing-gum is entirely unknown to them.

Let us hope that in giving to our little sisters in the land of the sun-rising our American civilization, this one bit of barbarism may be left out.

日本人の名前や服や履物などの装い、服が祖母、母から受け継がれる様子、化粧、子守をしながら遊ぶ子どもたち、雛祭り、礼儀正しさ、学校では漢字も習うこと、裁縫や織物も習うこと、そして先生について一斉に唱和する様子などが描かれる。これらの文章は、いずれも当時の日本の風景を映し出すとともに、おそらく日本を知らない米国の子どもたちを念頭において

書かれており、優れた書き手としてのルーシーの姿を浮かび上がらせるものといえよう。

## 6. 帰国後のルーシーとジョン

ジョン・イング夫妻は東奥義塾在職中にキリスト教をこの地に根付かせ、東奥義塾からアメリカ、インディアナ州へ留学生も送り出し、女子生徒にも英語や編み物を教えるなど、数々の貢献を残して1878年3月に弘前を去った。原因はルーシーの健康悪化だった。ルーシーは家族とともに母国に戻り、父の家で一年ほど過ごした。症状は重く、時に瀕死の状態となる程だったが、ルーシーは明るく過ごしていたという。夫妻はミズーリ州ソルトスプリングの自宅に戻ったが、1881年4月15日にルーシーは旅立った。享年44歳。葬儀は会衆派とメソジスト派の牧師らによって、4月17日にテレホートにあるプレスビテリアン教会で執り行われた。たくさんの人々が集まり、弘前の東奥義塾からも、当時インディアナ州グリーンキャッスルにあるインディアナ・アズベリー大学(現在のデポー大学)に留学していた4人が参加し、そのうち珍田捨己、佐藤愛磨が弔辞を捧げた。ルーシーは現在、ハウレー家の墓地である Woodlawn Cemetery で眠っている。

妻を亡くしたジョン・イングは翌年、宣教師の職を辞した。また1884年6月に、フェリシア・H. ジョーンズ(Felicia H. Jones) と再婚した。1886年、フェリシアとの息子であるスタンフォード・イングが生まれたがまもなく亡くなった。1888年、娘のラヴィナが誕生した。イングは1891年に故郷のイリノイ州ベントン近くのトンプソンビルにあるリバティ教会そばの土地を購入し、それからは農業に従事して過ごした。1904年3月には、ルーシーとの間に生まれた長男、ジョン・ハウレー・イングがメキシコで亡くなった。1918年にはフェリシアもこの世を去った。やがてジョンは自宅敷地の隣にある教会に顔を出さなくなった。晩年の彼は自ら

の過去の経験について語ることもなく、日本や中国の人々から贈られた品々に囲まれた彼をみて、近隣の人々は「異教徒ではないか」とさえ思っていたと言う<sup>41</sup>。

若き日にアジアの異教地で妻ルーシーとともにキリスト教布教に全力を尽くしたジョン・イングは、1920年6月4日、最後に残った娘のラヴィナに看取られながら、79歳の生涯を閉じた。葬儀は元宣教師としてではなく、軍人 Captain Ing として行われ、現在はイリノイ州ベントンのマソニック&オドフェローズ墓地で、フェリシア、ラビナとともに眠っている。

(ハウレー家の墓地とルーシーの墓標 撮影：  
Karen Mullin)



おわりに—教育と伝道に捧げた人生

本稿では、今まで宣教師夫人としての付属的な立ち位置でしか語られなかったルーシーの生涯について、*Heathen Woman's Friend* とデポー大学所蔵資料をもとに、できるだけその実

像を追ってみた。個人としてのルーシーは、当時の米国の中で最も高い水準の女子教育を受けた有能な女性であり、さらに学校から卒業までの12年間、5つの郡にわたる広い範囲の中で教育の実践経験を積んでいた人物でもあった。結婚と中国派遣が同じ1870年であったところを見ると、教師をやめてジョンと結婚したときにはすでに海外伝道への意欲を彼女自身が持っていたものと思われる。そして着任先の中国の言語も学び、夫とともに宣教地の九江に行ったとき、彼女の周りにいたのは、福音どころか文字を読み書きできない女性たちだった。そうした人たちに声をかけ、文字の読み方を教え、そして聖書を読めるようにと2年間を費やして導き、同地に女性宣教師2人が着任するまでの土台を築いた。中国語ができなかったこれらの若い女性宣教師たちは、ルーシーが作った土台をもとに速やかに活動を開始できたのである。また「現地の学識ある女性は医学知識にしか関心がないので、女性医療宣教師を送り込んだほうが良い」と言う彼女の意見も、現地の実情を踏まえた的確なものだったのだろう。今まで全く顧みられなかったこのルーシーの根気強い努力は、称賛に値すると思われる。そして見逃してはならないのは、こうした活動自体がすでに宣教活動であり、本来であれば、宣教師夫人ではなく宣教のプロとして送り込まれる女性宣教師の仕事範囲だった可能性があることである。本稿で引用したように、本来の宣教師夫人の仕事とは、夫を手伝いながら子供を育て、クリスチャンホームを築くことだった。異教の地での出産育児も含めた生活の切り盛りは、それだけでもたいへんなことであり、さらに宣教活動となると命を失う場合さえあった。こうしたことを鑑みると、中国でのルーシーの生活はすでに彼女の体力の限界を越すほどの努力であり、それゆえに帰国を余儀なくされるほどの重い病になってしまったということなのかもしれない

またこうした中国での生活を踏まえて日本で

の様子を考えてみたとき、日本で宣教活動はスタート時点から九江とは全く違っていたことがわかる。中国では、中国語を習得していた夫妻が福音を伝えようにも、文字を読めない人が大半だった。特に読み書きできない中国人女性に根気強く言葉を教えてきたルーシーにとって、母国語の読み書きはもちろんできて、さらに英語まで習おうとする女の子たちが集まる弘前での生活は、それまでの苦労を払拭するほどやりがいのあるものだったのかもしれない。オルガンの周りに集まる子供たちに讃美歌をおしえつつ、英語リーダーの教科書に入り込むキリスト教の考え方を伝えつつ、本多庸一のような高いリテラシー能力を持った協力者も得てキリスト教布教の基礎を築いた弘前時代は、短かった彼女の人生においてもっとも輝いた時代であったと考えるのもそれほど間違いではないだろう。

稿を閉じるにあたり、最も重要と思われることを指摘しておきたい。本稿で明らかにしたルーシー・イングの活動や貢献がこれまでなぜ顧みられなかったのか。それはやはり、彼女が単独で派遣される女性宣教師としてではなく、宣教師である夫の妻としてみられていたからと思われる。夫のジョンは、青森県の近代化や地域の発展に尽力し、青森県のみにとどまらず明治初期の日米交流にも貢献したとして、亡くなった後もたびたび顕彰されている。これらすべての功績は夫の名前によって記されているのである。しかしルーシーの人生に焦点を合わ

せると、現地女性への伝道など、女性でなければ難しかったことに貢献しており、それが合わさっての夫妻の活動成果であることがわかる。それを考えたとき、初期の海外伝道で多かった、宣教師の妻として活動した人物たちの経歴や伝道地の活動を今一度注目する必要があると思われる。それはすなわち、ジェンダーの視点を取り入れた歴史の見方につながるものであり、時代の制約の中で生きた女性の限界性や可能性をあらためて認識することにもつながるからである。妻の立場ではあったとはいえ、ルーシーはまさに主体的に教育と伝道に生きた人生だった。それは、キリスト教布教における宣教師夫人の貢献に、あらためて目を向けるうえでのモデルケースになると考えられるのである。

#### 付記

本稿は2006-7年度日本学術振興会科学研究費補助金を得た研究により収集した資料のうち、未発表の資料を中心として執筆した。調査先である DePauw University, Archives & Special Collection の当時のスタッフの方々にはたいへんお世話になった。あらためて謝意を表す。

また最初の調査から10年以上が過ぎ、当時は現地でしか入手できなかったものが、今ではデジタルオンラインで閲覧できる資料も増えている。本稿執筆にあたっては、過去の情報を整理しつつ、可能な限りネット情報も確認してURLを記載した。この分野の次なる研究の発展のささやかな礎となれば幸いである。

<sup>1</sup> 東奥義塾は旧弘前藩校の後身として1872年弘前に設立された私立学校である。開学資金は旧藩主の出資であり、生徒は士族が中心で、事実上「殿様の学校」としての存在だった。開学と同時に外国人教師を招聘して洋学に力を入れ、1877年にはアメリカに留学生も送り出した。イングは3人目の外国人教師として教鞭を取った。

<sup>2</sup> 東奥義塾にかんする先行研究など、詳細については拙著『洋学受容と地方の近代－津軽東奥義塾を中心に－』（岩田書院、2002）を参照のこと。

<sup>3</sup> イング夫人が指導した讃美歌の様子は、拙著「明治初期弘前における洋楽受容と讃美歌」北原かな子・浪川健治編『近代移行期における地域形成と音楽－創られる伝統と異文化接触』（ミネルヴァ書房、2020）pp.204-239 参照のこと。

<sup>4</sup> DePauw University はアメリカ、インディアナ州グリーンキャッスルにある大学で、もともとは Indiana Asbury University としてメソジスト派により設立された。ジョン・イングの母校であることから、イングの着任とともに同大学と東奥義塾とは教師派遣や東奥義塾生の留学など、明治前期に人の交流があり、現在でも津軽関係の近代史資料が同大学資料館に所蔵されている。なお、同大学は1884年にインディアナアズベリー大学からデポー大学へと校名が変更されているが、本稿では一貫してデポー大学として記述する。

<sup>5</sup> ルーシーの出生については、DePauw 大学所蔵資料のハウレー家の家系図などを参照した。DePauw University Archives, DC1515/Folder7

([https://depauw.libraryhost.com/repositories/2/archival\\_objects/33281](https://depauw.libraryhost.com/repositories/2/archival_objects/33281)) 2020年9月27日参照

DePauw University, Archives and Special Collection,

<sup>6</sup> New world Encyclopedia, より、“Mount Holyoke College” の項を参照した。

([https://www.newworldencyclopedia.org/entry/Mount\\_Holyoke\\_College#:~:text=Originally%20founded%20as%20Mount%20Holyoke,of%20many%20colleges%20for%20wome](https://www.newworldencyclopedia.org/entry/Mount_Holyoke_College#:~:text=Originally%20founded%20as%20Mount%20Holyoke,of%20many%20colleges%20for%20wome)) 2020年9月27日参照

<sup>7</sup> <https://lits.mtholyoke.edu/archives-special-collections/asc-research/asc-research-guides/alumnae-missionaries%20> 2020年9月29日参照

<sup>8</sup> <https://lits.mtholyoke.edu/archives-special-collections/asc-research/asc-research-guides/alumnae-missionaries#japan> 2020年9月29日参照

<sup>9</sup> *Central Christian Advocate* 1881.4.27, p.135 (DePauw University 所蔵資料)

<sup>10</sup> ジョン・イングについては、拙著『洋学受容と地方の近代－津軽東奥義塾を中心に－』（岩田書院、2002）を参照のこと。

<sup>11</sup> St. Luce M. E. Conference.

<sup>12</sup> デポー大学史料館所蔵資料「ING FAMILY TIMELINE」。

<sup>13</sup> *Central Christian Advocate* 1881.4.27, p.135 (DePauw University 所蔵資料)

<sup>14</sup> Lucy H. Ing, 'Letter from Kiu Kiang, China' *Heathen Woman's Friend*, Vol.3-9, 1872.3, p249. *Heathen Woman's Friend* は下記の URL でも参照可能である。

(<https://archive.org/stream/HeathenWomansFriendV.4/Heathen%20Woman%27s%20Friend%20V.%203#page/n105/mode/2up>) 2020年9月29日参照。なお、九江は現在 Jiujiang と表記されている。また次の URL でも参照可能。

(<https://catalog.hathitrust.org/Record/000640173>) 2020年9月29日参照

<sup>15</sup> デポー大学史料館所蔵資料「ING FAMILY TIMELINE」(Unpublished) による。

<sup>16</sup> *Central Christian Advocate* 1881.4.27, p.135 (DePauw University 所蔵資料)

<sup>17</sup> Ing, John, Letter to Father, Mother, and Sisters, Nov.23, 1874. Unpublished.

この資料はジョン・イングが母国の両親に宛てた書簡の一つで、弘前市の東奥義塾高等学校に写しが保管されている。なお、山本博「ジョン・イングと弘前バンド－津軽の英学（その五）－」（『文化紀要』26号、1987）pp.11-13にも紹介されている。

<sup>18</sup> デポー大学に所蔵されているイングの書簡全通は、下記の URL で閲覧可能である。

<https://palni.contentdm.oclc.org/digital/collection/archives/id/9460/rec/1> 2020年9月28日参照。

<sup>19</sup> 齋藤元子『女性宣教師の日本探訪記－明治期における米国メソジスト教会の海外伝道－』新教出版社、2009、「メソジスト監督派教会女性海外伝道運動への来日宣教師夫人の貢献」『ウエスレー・メソジスト研究』10号、2010.4, pp.85-97など。

<sup>20</sup> 唯一女性の活動として容認されたのが、教会に関わる事柄だったが、そこから女性たちは自らの活動の場を広げていった。これをアメリカ・フェミニズムの原点と指摘する研究者もいる（齋藤、前掲書、p.34）

<sup>21</sup> 齋藤元子「メソジスト監督派教会女性海外伝道運動への来日宣教師夫人の貢献」『ウエスレー・メソジスト研究』10号、2010.4, p.87.

<sup>22</sup> 齋藤元子『女性宣教師の日本探訪記－明治期における米国メソジスト教会の海外伝道－』新教出版社、2009、p.37.

<sup>23</sup> 'Miss Howe, and Miss Hoag, go from the Northwestern Branch, to Kiu Kiang, China', *Heathen Woman's Friend* Vol.4-5, 1872.11, p.364.

<sup>24</sup> There are estimated to be forty thousand inhabitants in KiuKiang, and there are numberless little villages scattered around the city like the satellites of a planet. The magnitude of the work daily increases upon our vision. On every side are women and children whom we would gladly raise from their degraded condition, but our ignorance of the language prevents our immediate personal labor. (*Heathen Woman's Friend*, Vo.4-11, 1873.5, p.454)

<sup>25</sup> We have a Christian Bible woman, whom Mrs. Ing induced to learn to read, for the purpose of assisting us when we should arrive. (*Heathen Woman's Friend*, Vo.4-11, 1873.5, p.454)

<sup>26</sup> She has read nearly all of the four gospels, and comes every morning to read a chapter with our Chinese teacher. She is bright, cheerful woman, and we think will be very useful. (*Heathen Woman's Friend*, Vo.4-11, 1873.5, p.454)

<sup>27</sup> We have been with her to visit some of the women, and the dignified, yet unassuming way in which she gains their attention while reading, and the respect shown her, are gratifying. Yet this is not always the ease; sometimes she is almost disheartened. They try the effect of ridicule, and tell her she is paid to talk the foreign doctrines. (*Heathen Woman's Friend*, Vo.4-11, 1873.5, p.454)

<sup>28</sup> KiuKiang is a noted "Literary City", and, what is most surprising, we find women who are able to read. Eight such women have come to our notice; two of them are church members, and have only studied the Bible within the past two years, under the advice of Mrs. Ing.

(Miss Gertrude Howe: From the Middle of the Middle Kingdom, *Heathen Woman's Friend*, Vol.5-3, 1873.9, p.523.)

<sup>29</sup> 齋藤元子「メソジスト監督派教会女性海外伝道運動への来日宣教師夫人の貢献」『ウエスレー・メソジスト研究』10号、2010.4、p.85.

<sup>30</sup> 弘前のキリスト教受容については数々の研究蓄積がある。主な先行研究については拙著『洋学受容と地方の近代』（岩田書院、2002）、『津軽の近代と外国人教師』（岩田書院、2013）にまとめている。

<sup>31</sup> 山本博「ジョン・イングと弘前バンドー津軽の英学（その五）ー」（『文化紀要』26号、1987）pp.1-33.

<sup>32</sup> 保村和良「弘前における「女小学」の濫觴ー明治初期東奥義塾女小学と含英女小学ールーシー・E. イングと楠美太素の資料からみた女小学教育ー」『東北女子大学・東北女子短期大学紀要』55、2016、pp.88-98. にもこれらのグリーンキャッスルバンナー紙掲載資料が引用されている。

<sup>33</sup> 北原かな子「明治初期弘前における洋楽受容と讃美歌」（北原かな子・浪川健治編『近代移行期における地域形成と音楽ー創られる伝統と異文化接触』ミネルヴァ書房、2020）、pp.204-239. ここで1875年刊行分の中から音楽に関連した内容を引用している。

<sup>34</sup> これは齋藤も同様に指摘している。前掲論文、pp.87-88

<sup>35</sup> *Fifty-Fifth Annual Report of the missionary Society of the Methodist Episcopal Church for the Year 1873*, January, 1874, p61.

<sup>36</sup> たとえば気賀健生『本多庸一』（青山学院、1968）など。

<sup>37</sup> The Sabbath preaching in the school building in the native language is well attended, not only by the teachers and pupils but by a good number not connected with the school. I do not understand the earnest words of the preacher, but it is a most interesting sight...(Lucy E. H. Ing, 'Notes from Japan' *Heathen Woman's Friend*, Vol.7-3, 1875.9, p.57.)

<sup>38</sup> 齋藤、前掲論文、pp.88-89.

<sup>39</sup> 齋藤、前掲論文、pp.89-90.

<sup>40</sup> 齋藤、前掲論文、pp.94-96.

<sup>41</sup> 晩年のイングについては、Shepard, Ernest E., "A New View of John Ing", (*ILLINOIS*, March 1979, Vol.18, No.2, pp.8-18) に詳述されている。著者のシェパード氏は高校の歴史の教師で、子供の頃にイングの自宅から程近いところに住んでおり、晩年のイング本人と面識があった。同郷出身のイングに関心を持ち、ジョン・イングについての研究を行なった。

(青森中央学院大学 看護学部 教授 きたはら かなこ)